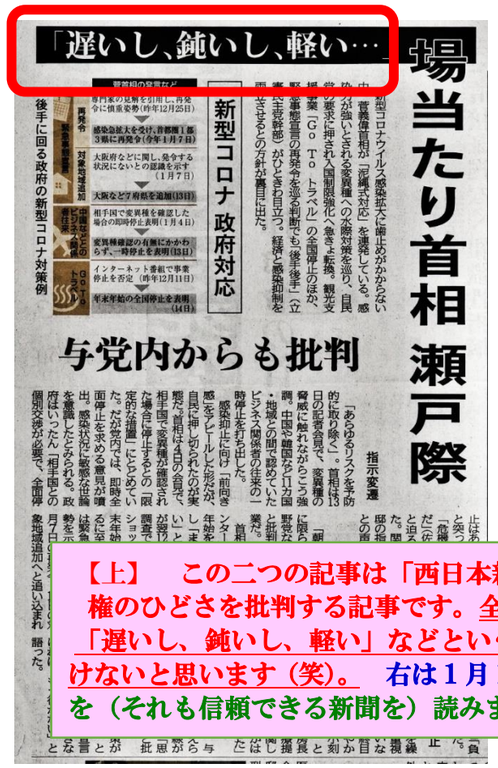
ASSETS OF OUR LIVES

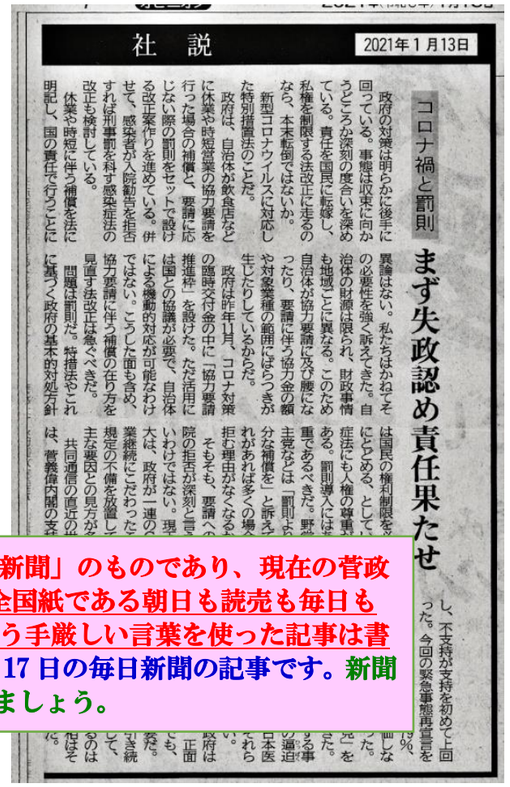
≪確かな知識や教養を身につけ・豊かな心を育て・充実した人生を!!≫

2021年01月１７日　第35巻03号

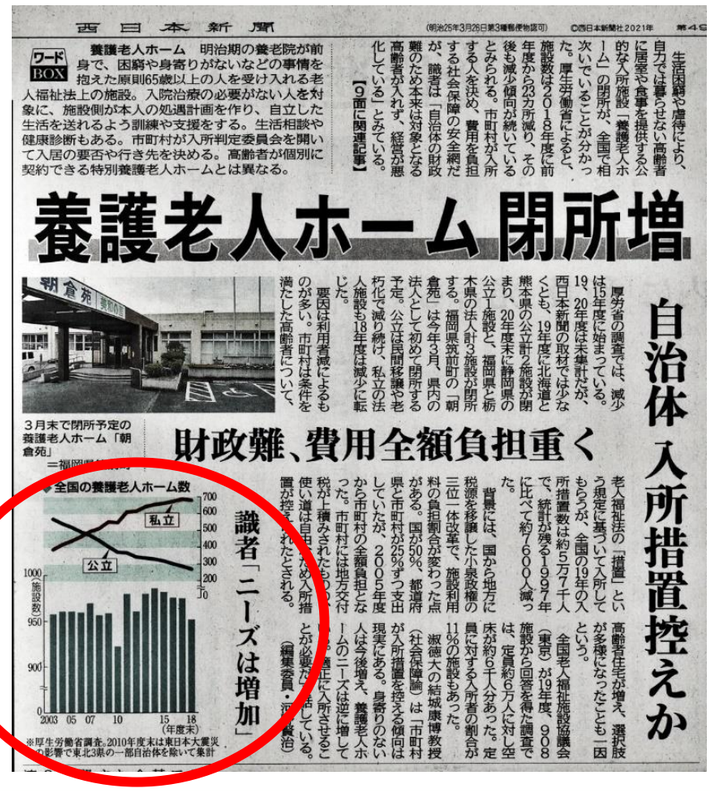
地方紙である「西日本新聞」への高い評価

最近西日本新聞を読んでいると、面白い記事が多く、政府への批判も的確であり、記事の配置もとても読みやすくなっていると感じていました。実際にも毎日新聞の紙上でも、西日本新聞を高く評価する記事が載っており、また、西日本新聞は編集方針や記事の記載についての改革に成功しており、テレビでも自信たっぷりに宣伝をしているのが目につく今日この頃です。西日本新聞の様な地方紙は、朝日や「毎日新聞」や読売などの全国紙ではなく、地方紙であるとして、軽く扱われることがよくあるのですが、地元の人たちには身近な情報がわかるだけではなく、たとえば栃木県の旧足利新聞（現在の栃木新聞）が100年余り前、公害と戦った田中正造を応援したように、歴史の流れでは、大きくないがゆえ真実が伝えられるという重大な責任を果たしてきているのです。現在では沖縄県のいくつかの地方新聞は、日本本土の記事とは異なる「真実」を発し続けています。館長も日本各地に旅行するたびに、その地方の新聞を読むことを楽しみにしています。今後も毎日新聞と共に、リベラルで楽しい地元の出来事満載の西日本新聞の記事をＡＳＳＥＴＳにたくさん張り付けようと思っています（笑）。


「遅いし、鈍いし、軽い…」
場当たり首相 瀬戸際
新型コロナ 政府対応
与党内からも批判


社説　2021年1月13日
コロナ禍と罰則　まず失政認め責任果たせ

毎日新聞
内閣支持率続落33%
緊急事態「遅すぎる」71%
本社世論調査

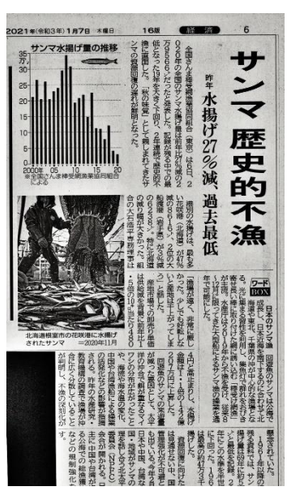

西日本新聞
養護老人ホーム 閉所増
自治体 入所措置控えか
財政難、費用全額負担重く
識者「ニーズは増加」

【上】　この二つの記事は「西日本新聞」のものであり、現在の菅政権のひどさを批判する記事です。全国紙である朝日も読売も毎日も「遅いし、鈍いし、軽い」などという手厳しい言葉を使った記事は書けないと思います（笑）。　右は１月17日の毎日新聞の記事です。新聞を（それも信頼できる新聞を）読みましょう。

西鉄が国際物流拠点
福岡空港周辺 新設へ

これも西日本新聞の記事で、「西鉄」と「シャボン玉石けん」はコロナを防ぐという地元の企業の記事になります。
※「さんま」は日本中の魚好きにとっての大悲劇です。【右】

天然せっけんに コロナ抑制効果
メーカーと広島大研究　3分間で99%不活性化

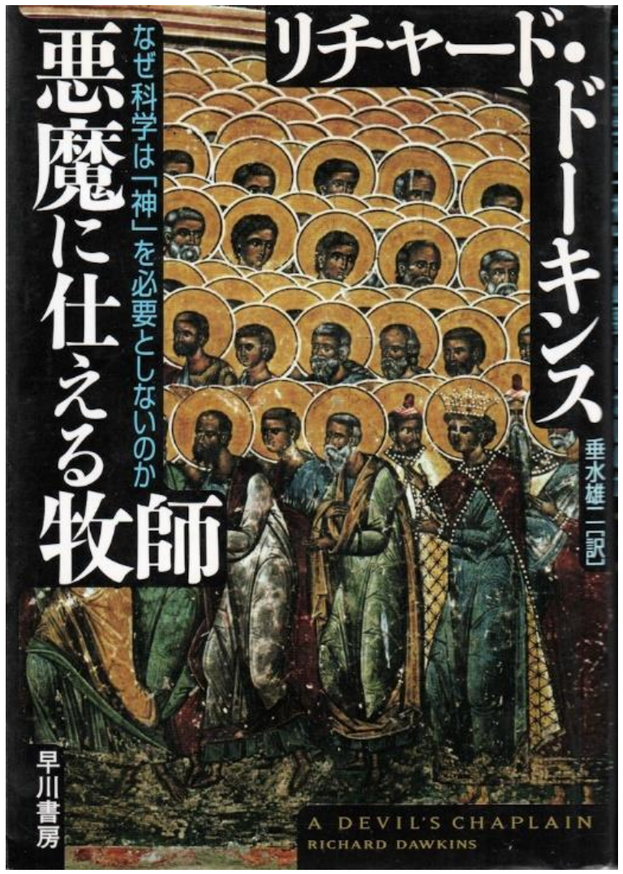

サンマ 歴史的不漁

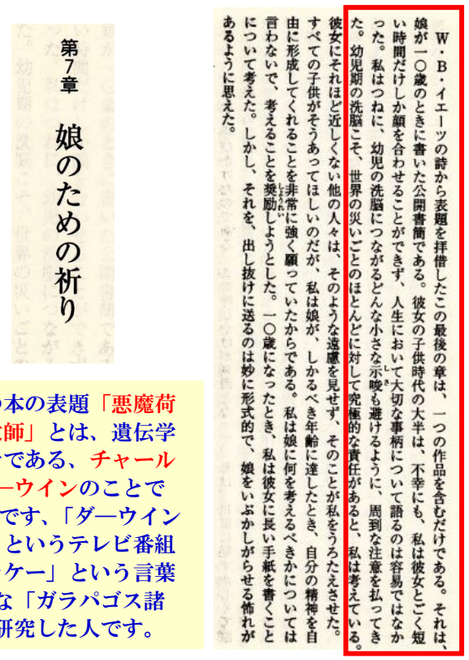
【上】　公立国立病院を減らし、医師や看護師を増やさず、医師の仕事を増やし（医師による会計処理なども個人病院では必要）続けたこと、国立や公立大学の授業料値上げと教授の待遇の悪化と大学への経済援助の削減、私立大学をやたらに増やして競争させて私立大学を破滅に追い込む、郵便制度の破壊など、「ここ30年余りの新自由主義的な悪政」が、この国をめちゃくちゃにしてきました。上の記事は西日本新聞の記事で、高齢者を中心とした「弱い人たち」が生きていけない日本になってしまったという記事です。

【追記】１月１６日のデータでは、大阪府のコロナによる死者が東京都を上回りましたが、これも「大阪維新の会」という、「効率」だけを優先する、無慈悲で無責任な政党が、大阪市民にウソの情報を流して煽り（あおり）立てて、病院を減らしつづけたからこんなことになったのです。それにもかかわらず大阪の人たちは、橋下徹や松井一郎や吉村洋文たちを支持する人が多いのですから、開いた口がふさがりません。数日前のテレビに、ノーベル賞を受賞された、福岡高校の先輩の大隅良典さん、同じくノーベル賞受賞者の本庶佑さんがでて「廃校などを利用して国立公立の病院を早急に増やすように」という提案を為されていましたが、安倍も菅も、大企業や富裕層などのお金持ちの言うことは聞いても、庶民の意見や、医学の専門家でありなおかつノーベル賞を受賞した人たちの意見を聞く耳は持たないみたいですね。（泣）

左右の書物は世界を代表する「遺伝学」の権威である、リチャード・ドーキンス氏のものです。このうちの【左】には、ドーキンスから愛する10歳の娘に、10歳にもなれば物事を考えることができるはずだからということを前提に、心を込めたメッセージが書かれています。この本の中には、あなた達小学校５年生から大学生までの人に伝えたい彼からの重大なメッセージがあります。それは次の３つは決して信じてはならないという内容です。信じてはならない３つとは、「伝統」「権威」「啓示」です。（なぜなのかについても書かれています。）えっ？まさか！と驚かれる人が多いかもしれません。しかし人間の良心を信じ、世界の平和を実現し、公平で公正な社会をつくり、地球環境を守るためには、彼のような考えが必要だと館長も思います。本は１０１教室の横の廊下に置いておきます。

現代が学べる **志　成　館**

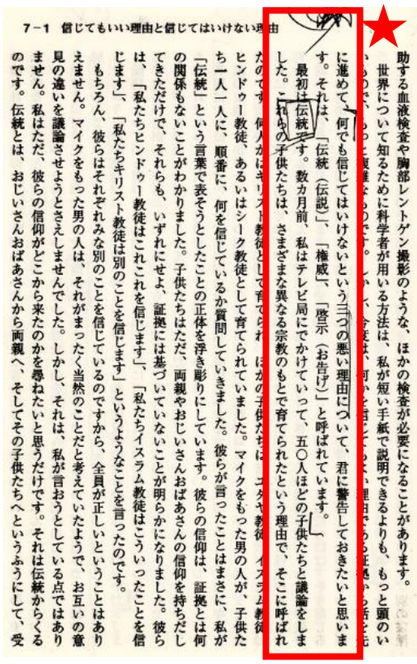




第7章　娘のための祈り

W・B・イエーツの詩から表題を拝借したこの最後の章は、一つの作品を含むだけである。それは、娘が一〇歳のときに書いた公開書簡である。彼女の子供時代の大半は、不幸にも、私は彼女とごく短い時間だけしか顔を合わせることができず、人生において大切な事柄について語るのは容易ではなかった。私はつねに、幼児の洗脳につながるどんな小さな示唆も避けるように、周到な注意を払ってきた。幼児期の洗脳こそ、世界の災いごとのほとんどに対して究極的な責任があると、私は考えている。彼女にそれほど近しくない他の人々は、そのような遠慮を見せず、そのことが私をうろたえさせた。すべての子供がそうあってほしいのだが、私は娘が、しかるべき年齢に達したとき、自分の精神を自由に形成してくれることを非常に強く願っていたからである。私は娘に何を考えるべきかについては言わないで、考えることを奨励しようとした。一〇歳になったとき、私は彼女に長い手紙を書くことについて考えた。しかし、それを、出し抜けに送るのは妙に形式的で、娘をいぶかしがらせる怖れがあるように思えた。

【左】の本の表題「悪魔荷仕える牧師」とは、遺伝学の先駆者である、チャールズ・ダーウインのことです。そうです、「ダーウインが来た」というテレビ番組や「ガラケー」という言葉で有名な「ガラパゴス諸島」で研究した人です。



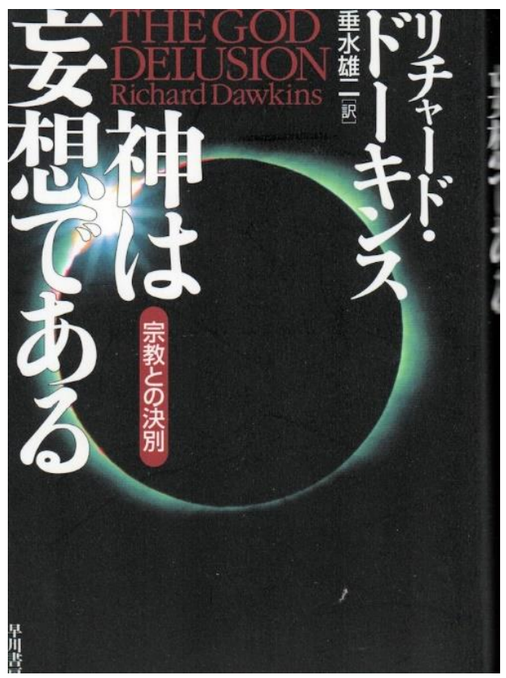
7－1　信じてもいい理由と信じてはいけない理由

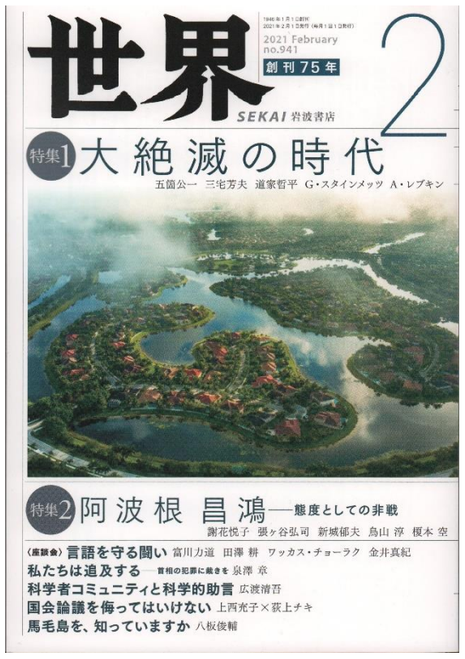
助する血液検査や胸部レントゲン撮影のような、ほかの検査が必要になることがあります。世界について知るために科学者が用いる方法は、私が短い手紙で説明できるよりも、もっと頭のいいやり方です。しかし、なぜ私は可能なかぎりの理由から話をしたいのかというと、君に警告しておきたいと思います。

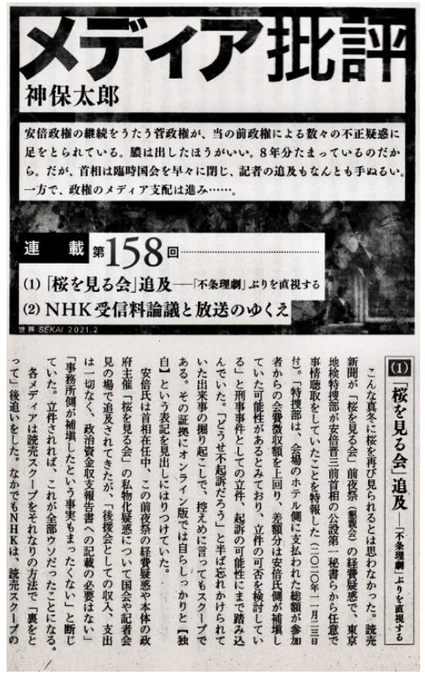
に進めて、何でも信じてはいけないという三つの悪い理由について、君に警告しておきたいと思います。それは、「伝統（伝説）」、「権威」、「啓示（お告げ）」と呼ばれています。

最初は伝統です。数カ月前、私はテレビ局にでかけていって、五〇人ほどの子供たちと議論をしました。これらの子供たちは、さまざまな異なる宗教のもとで育てられたという理由で、そこに呼ばれたのです。何人かはキリスト教徒として育てられ、ほかの子供たちは、ユダヤ教徒、イスラム教徒、ヒンドゥー教徒、あるいはシーク教徒として育てられていました。マイクをもった男の人が、子供たち一人一人に、順番に、何を信じているか質問していきました。彼らが言ったことはまさに、私が「伝統」という言葉で表そうとしたことの正体を浮き彫りにしています。彼らの信仰は、証拠とは何の関係もないことがわかりました。子供たちはただ、両親やおじいさんおばあさんの信仰を持ちだしてきただけで、それらも、いずれにせよ、証拠には基づいていないことが明らかになりました。彼らは、「私たちヒンドゥー教徒はこれこれを信じます」、「私たちイスラム教徒はこういったことを信じます」、「私たちキリスト教徒は別のことを信じます」というようなことを言ったのです。

もちろん、彼らはそれぞれみな別のことを信じているのですから、全員が正しいということはありえません。マイクをもった男の人は、それがまったく当然のことだと考えていたようで、お互いの意見の違いを議論させようとさえしませんでした。しかし、それは、私が言おうとしている点ではありません。私はただ、彼らの信仰がどこから来たのかを尋ねたいと思うだけです。それは伝統からくるのです。伝統とは、おじいさんおばあさんから両親へ、そしてその子供たちへというふうにして、受

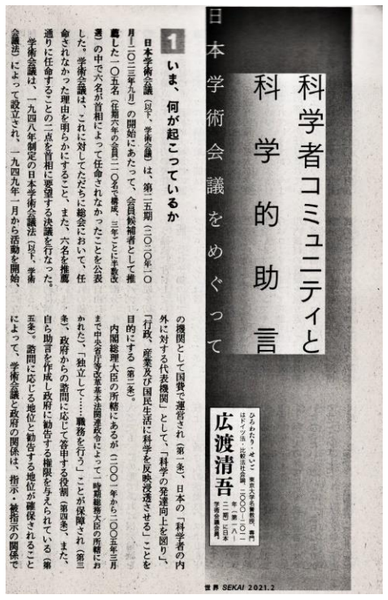






(1)「桜を見る会」追及―「不条理劇」よりを直視する

こんな真冬に桜を再び見られるとは思わなかった。読売新聞が「桜を見る会」前夜祭（懇親会）の経費疑惑で、東京地検特捜部が安倍晋三前首相の公設第一秘書から任意聴取をしていたことを特報した（二〇二〇年一月二三日付）。「特捜部は、会場のホテル側に支払われた総額が参加者からの会費徴収額を上回り、差額分は安倍氏側が補填していた可能性があるとみており、立件の可否を検討している」と刑事事件としての立件、起訴の可能性にまで踏み込んでいた。「どうせ不起訴だろう」と半ば忘れかけていた出来事の掘り起こしで、控えめに言ってもスクープである。その証拠にオンライン版では自らしっかりと【独自】という表記を見出しにはりつけていた。

安倍氏は首相在任中、この前夜祭の経費疑惑や本体の政府主催「桜を見る会」の私物化疑惑について国会や記者会見の場で追及されてきたが、「後援会としての収入、支出は一切なく、政治資金収支報告書への記載の必要はない」「事務所側が補填したという事実もまったくない」と断じていた。立件されれば、これが全部ウソだったことになる。各メディアは読売スクープをそれなりの方法で「裏をとって」後追いをした。なかでもNHKは、読売スクープの

【下】は、雑誌「世界」の２０２１年２月号の記事の一部です。近い将来このようなまじめな書物を読むようになってください！！（森）